子供の虚言

――眞實への教育（一）――

東京女子高等師範學校助教授　倉澤剛

一

僞り飾るといふことなく、いつも眞實を語る子供であつてほしいとは、人の親の切なる念願である。虚言こそは、子供の魂の健やかなる成長を祈る者にとつて何よりも大きな不安の一つでなければならぬ。從つて昔から、子供の躾に思を潛めた心ある人々は、必ず子供の虚言を重大な訓育問題として掲げてゐる。子供の虚言とは、一體どのやうなものであらうか。そして、これに對する教育的處置は如何にあるべきであらうか。

二

一方には「あらゆる子供の虚言的傾向」が主張せられ、他方には「六歳以前の子供に何等咎めらるべき虚言はない」と論ぜられてゐる。果してどうなのであらうか。成程、子供は屢〻本當でないことを口にする。ごく幼い子供でも、屢〻本當でないことを口にする。しかし、子供はこれを虚言として意識してゐる場合は極めて少い。だから、子供の虚言を豫防し、又は矯正する方法を求める前に、我々はまづ虚言とは何であるかを考へて見なければならない。

虚言は「意識的に他人を欺かうと目指す陳述である」（チルリヒ）と言はれ、また「作爲された欺瞞によつて、何等かの目的を達するために、ある事態を意識的に僞つて表現すること」（ライニンゲル）と定義されてゐる。シュテルンによれば、虚言といふのは、「作爲によつて、他のある目的を達するために、意識的に誤つた表現をすること」である。そして、眞の虚言は、次の三點において、他の誤つた表現から區別せられる。

第一に、誤謬の意識があること、自分が今言つてゐることが、本當の事實ではないといふ意識があること。

第二に、瞞着しようとする意圖があること。他人を欺かうといふ、はつきりした計畫があること。この二點におい

て、虚言は單なる記憶違ひや思ひ違ひから區別せられる。

第三に、一定の目的によつて導かれてゐることゝ。何等かそこに目的があつて、その目的を達成せんがための言ひ立てでなくては虚言とは言へない。この點において、虚言は單なる幻想的な言表の誤りから區別せられる。

この三つは、「本來の虚言の徵表」とされてゐるが、このやうな徵表の存在は、すでに精神發達の比較的高い段階を前提としてゐる。從つて幼い子供には、本來の虚言は未だ決して現れない。生後一年以内に見られるやうなものは、大部分は「外觀上の虚言」であるか、又はほんの「虚言への崩芽」に過ぎない。また子供は純粹に遊戯的な言ひ立ての間違ひをするが、これを虚言と見ることの大きな誤りであることは周知の事實である。

そも〳〵虚言は事態の表現である以上、子供は虚言をする前に、表現の能力を具へてゐなければならない。子供はお誕生の前後から、模倣遊戯の形式で人眞似の表現をするのであるが、これが子供の最初の言語的な表現形式である。だから、滿一歳前後、及びこれ以後に至つても、言語能力がほゞ自由になるまでは、いはゆる虚言といふ現象は見られない。

けれども、言語能力が具はつたといふだけでは、まだ虚言の要件としては足りない。子供は最初はたゞ正しい表現だけしか出來ないで、僞りの表現はまだ出來ないといふ段階があるからである。更に、僞りの表現をなし得るに至つても、これを一定の目的に利用することを知らない。これを一定の目的のために利用し得るやうになるためには、ある程度まで因果の意識が發達してゐなければならない。そして、因果の意識が芽生へるのは、凡そ三歳の後半、しきりに「何故?」といふ問を發する時期であるとされてゐる。しかも、因果の關係を理解し得るに至つても、必ずしもこれを直ちに應用し得るとは限らない。何となれば、他の場合と同樣に、理解は應用に先立つものだからである。かやうに考へてゆくと、四歳までは未だ虚言の要件を具へてゐないと言はねばならぬ。よし時として四歳で虚言の要件を具へてゐる場合があるにもせよ、未だこれを自由に利用し得るには至つてゐないやうである。勿論、無意識的な衝動的な虚構は、動物の世界にも見られ、――カムフラーヂといふ現象を見よ――兒童にも早くから現れてゐる。しかし、意識的な、そしてある目的に向けられた虚構としての虚言は、はるかに遲れて現れるのである。

三

子供の虚言として、まづ第一に注意すべきは「幻想に基づく虚言」Phantasielüge である。これは、子供の想像力が大きいところから起る、無邪氣な遊戯性のものである。

例を擧げて考へて見よう。

お隣りの家の三歳半になる太郎は、表に出て自由に遊んでゐたが、ふと外へ出た私のところへ飛んで來て、「うちのお父さんは病氣なの。」といふから私がびつくりしてゐると彼はつゞけて言ふのである。「ね、お父さん病院へ行つたの、もう何でも出來ないの、お母さんは泣いてらつしやるの。」その日の晝頃、子供の姉が私の家に見えたので、お父さんの容態をたづねたところ、太郎の言葉はまるで本當でない。實は、彼の父は額に小さい擦傷を受けたが、痛い〳〵と太郎の前で冗談に大さわぎをしたのであつた。さて太郎は一體私に虛言を言つたのであらうか。否、全く違ふ。現實の世界と想像の世界とを混同してゐる子供は、あらゆることが起り得ることのやうに考へ、事實と可能性との區別が出來ないのである。

この間、私は子供たちに、「春雄さんのお兄さんは、雪にすべつて脚を折つて、今も入院していらつしやるさうだよ。」と話した。すると私の話が終るか終らぬかに、四歳になる夏雄がとんきような聲で話し出した。「もう先、僕も崖から落ちて入院したよ。そのとき脚を折つて、今もまだ痛いの。」これも事實とは違つた言ひ立てには違ひないが、決して虛言と見るべきではない。この子は私の話に强く感動し、自分についても語りたくなり、そしてこれを口にしてみたに過ぎないのである。私はたゞ簡單に、「いゝえ、夏雄さん、それはあなただつたんぢやない。あなたの脚は痛みやしませんよ。」と言つてやると、その子もそれで滿足して、チョコ〳〵と走り去つた。

また、信心深い母を持つた五歳の秋雄は、「夜になると、いつも神さまが私のところへやつて來ます。昨夜私は眼を半分だけ開けて、そこに白髮の神さまを見ましたよ。」と言つたさうである。これも明かに虛構であるが、そこには、ぜひ神さまを見たいといふ、强い願望が動いてゐる。この期の子供に本來の幻想が、かういふ詩的形態をば、あたかも實際の現實のやうに語らせるものであらう。かういふ事例は、この他無數に擧げることが出來る。そして、かゝる虛構の原因は、子供が私達大人のやうに、觀念界と事實界とを區別してゐないところにある。

四

さて、この種の虛構は、勿論まだ本來の虛言ではないが、しかし教育上は決して放置すべきものではない。何となれば、これらの虛構は、內に貯へられた語彙によつて、危險な遊びをしようとする利己的な衝動であつて、これを放置すれば、法螺吹き、自慢癖や幻想癖に陷る虞が多いからである。

これに對する私達の治療法は、「それは違ひます。さうぢ

やなくて、かうなんです、」とはつきり言つてやり、物の本當の姿を明瞭にしてやることであるが、しかし、このことは私達にいろ〳〵の困難を思はせる。

更めて述べるまでもなく、子供はあらゆる生命なき事物を人格化し、生命ある事物と同樣に、生命なき事物と語らふ、しかも眞劍になつてこれと語らふ。のみならず、私達は、子供に假想の神話や童話をまことしやかに語り、またあらゆる自然現象を人格化して語り、これによつて子供に本具の想像力を活潑に働かし、そこに可愛い詩の世界を育んでゐるのである。今私達が、「白雲たなびき小羊むれて：：：：」と、調も輕く、子供と共に歌ひほれるとしたら、そしてそのとき、愛くるしい冬子が空を眺めて、眼を輝かしながら、「御覽よ、來ます、子羊が、お山の麓には羊小屋が：：：：」と言ひ出したとしたら、それは私達が子供に不眞實を言はせるやうに仕向けたのではなくて、實は子供と共に詩的表象の世界に安住してゐるのである。私達は子供の豐かな幻想世界を打壞してはならない。この子供の自由な幻想の奔放をば、殘酷にも「虛言」といふやうな名で呼ぶべきではあるまい。何となれば、虛言は正に不正であるが、幻想は高々不眞實に過ぎないからである。それで、かういふ思想乃至表象による一種の遊戯が、詩の世界に止まつてゐる限り、それはたゞに危險がないばかりでなく、却つて子供の內面生活を豐かにするものである。たゞ私達は、この種の幻想が事實の世界に侵入することを、注意深く抑へなければならない。事物を正しく、はつきりと見る態度を養はなければならない。このやうな態度の養成によつて、私達は子供に、「見せかけ」と「事實」との區別を徐々に知らしめるべきである。そして、このためには、「嚴密な事物直觀」が頗る有意義であつて、動物界や植物界の觀察は、この意味においても、保育の有力な手段たるを失はないと思ふ。（續く）

（二六頁より）

と云ふやうな發達を見るやうになりました。

今日、以上のやうな外面的な發達だけでなく、保育事業の內容も益〻充實せられ、保姆の自覺一般の理解等も日に〳〵深くなり、前途は無限の希望に滿ちてはおりますが、まだ〳〵理論と實際とが一致し我が幼稚保育の理想に到達するまでには、前途遼遠の感が致します。

不斷の努力、研究に依り益〻保育界の輝しい前途を祈つて止まない次第でございます。